

グローバルサウスはなぜウクライナの味方をしないのか

執筆 フェリックス・プラットナー、編集：コンスタンティン・フィリップ

ポレミックス 2026 年 4 月 10 日

[Pragmatic Indifference: Why the Global South Won't Choose Sides in Ukraine - Polemics](#)

西側諸国の苛立ち

ロシアによるウクライナへの全面侵攻を受け、欧州連合（EU）と一部の西側同盟国は、クレムリンの行動を躊躇なく非難した。その後数年にわたり、西側諸国はロシアに対して一連の広範囲にわたる経済制裁を課した。さらに、戦場におけるウクライナの防衛活動を支援するため、同国に対して巨額の資金・物資援助を提供し、現在も提供し続けている。

モスクワへの圧力を強める戦略の一環として、西側諸国は「グローバルサウス」諸国を自らの連合に組み込もうとも試みた。ブリュッセル、パリ、ワシントンの当局者たちは、途上国が西側の見解に同調し、ロシアに対する批判や措置に従うことを期待していた。しかし、グローバルサウスの大半の国々がロシアの侵略戦争を非難することに消極的な姿勢を示したため、こうした期待は概ね裏切られる結果となった。

この不一致は制裁に関してさらに顕著であり、途上国は西側の制裁体制への参加を拒んでいるように見えた。しかし、モスクワに対する懲罰的措置を講じることに抵抗を示すこの姿勢は、どこに起因しているのだろうか、そして、なぜグローバルサウスの主要な国々の多くが、中立的（あるいは親ロシア的）な立場をとっているのだろうか。

実利的な無関心

ウクライナ紛争に対するグローバルサウスの立場を理解するには、ある根本的な側面を考慮しなければならない。ほとんどの国々がとっている非同盟の姿勢は、国益を重視する外交戦略に根ざしている。例えば、南アフリカ、ナイジェリア、セネガルといった多くのアフリカ諸国は、伝統的に非同盟の外交政策を追求してきた。これらの国々は両陣営に依存しているため、ひとつの陣営に直接加担しないことが、最大の政治的・経済的利益を保証することになる。現在のウクライナ戦争は、西側諸国とロシアとの間の代理戦争と見なされている。

この背景にある理屈は、ロシアとグローバルサウスとの深い経済関係を考慮すれば明らかになる。特に武器、石油、小麦、穀物、肥料の輸入に関して、アフリカ諸国やブラジルなどの国々はロシアへの依存度が高い。これらの品目に対する禁輸措置でロシアに制裁を科せば、甚大な経済的・社会的危機を引き起こし、国益に反することになる。

この現象は、「実利的無関心」という新しい用語で説明されている。この政策スタンスを採用した代表的な例として、南アフリカとブラジルが挙げられる。両国は「現実的な無関心」という戦略を採ることで、二つの目標の達成を目指している。第一に、ロシアとの経済関係を維持することによる持続的な成長。第二に、ロシアと西側諸国の間の仲介役を務め、それによって国際舞台での地位を高めることである。

西側の偽善

途上国がウクライナ側に立つことをためらうもう一つの要因は、西側の過去（および現在）の行動に対する根深い不満である。西側が過去に「グローバルサウス」に対してとってきた扱いを踏まえると、（ロシアへの）非難を求める声は極めて偽善的であると受け止められ、新植民地主義の一形態として解釈された。まるで欧州や米国が、かつての植民地の政策を自分たちが指示する権限を依然として持っている信じ続けているようだった。

この姿勢が依然として根強いことは、2022年の「アフリカにおけるロシアの悪意ある活動に対抗する法律（Countering Malign Russian Activities in

Africa Act)」に如実に表れた。米下院で可決されたこの法案は、ウクライナでのロシアの行動に対し、非難や制裁を拒否したアフリカ諸国の政府を懲罰するものだった。しかし、この法律は全く逆の効果をもたらし、「新植民地主義的な西側諸国」がグローバルサウスに自らの価値観や規範を押し付けようとしているというクレムリンの主張を助長する結果となった。

この考えを反映して、インドの S・ジャイシャンカル外相は 2022 年 6 月の会議で、次のように嘆いた。「欧州は、『自国の問題は世界の問題だが、世界の問題は欧州の問題ではない』という考え方を改めなければならない。」

さらに、途上国の間では、欧米や米国主導の国際機関に対する深い不満が見受けられる。例えばブラジルは、欧州と米国が支配している世界銀行や IMF の現行の仕組みに不満を示している。同時に、南アフリカは NATO に対して頻繁に厳しい批判を繰り広げている。NATO がウクライナ戦争を煽ったと非難するだけでなく、（他のアフリカ諸国と共に）2011 年のリビア介入を例に挙げ、NATO の偽善性を糾弾している。

ロシアとの共通の目標

グローバルサウスは、西側諸国によって押し付けられた冷戦後の世界秩序に長らく不満を抱いてきたが、ロシアと核心的な理念を共有していることに気づき始めている。それは、米国・西側主導の単極世界を終結させ、多極的な体制へと置き換えることである。2024 年にエジプト、エチオピア、イラン、アラブ首長国連邦を加盟国として迎え入れた「BRICS+」のような同盟の強化と拡大が示すように、グローバルサウスの諸国はますます西側に背を向けつつある。

その代わりに、彼らは同等の立場の国々との協力を目指している。一方、ロシアは西側の制裁を回避するために、途上国との継続的な協力を必要としている。グローバルサウスと西側の間の政治的亀裂を広げるため、モスクワは反植民地主義的なレトリックを用い、かつてソ連が脱植民地化を支援していたことを改めて強調している。こうした取り組みは、2024 年 2 月にロシアが「諸国民の自由のために」フォーラムと題した会議を開催した際に顕在化した。このイベントには 60 カ国から 400 人の代表が参加し、「西側の新植民地主義」に対抗するため、グローバルサウスとの同盟を築くことを目的としていた。

今後の重要な役割

ブラジル、南アフリカ、インドなどのグローバルサウスの新興国は、力をつけて国際社会でより自立した存在になりつつある。しかし、ロシアと西側（欧米）の対立の中で、これらの国々がどちらか一方に肩入れするのはとても難しく、その結果、外交方針が矛盾して見えることもある。彼らは 国家主権の尊重や反帝国主義 を強く主張している一方で、ロシアのウクライナ侵攻を公に批判することはほとんどない。

それでも、特に BRICS 諸国 を中心としたグローバルサウスが、この戦争の解決に大きな影響力を持っていることは確かである。もし彼らがロシアに対してより批判的な立場を取り、制裁に協力するようになれば、ロシアが戦争を続けたり正当化したりする力は大きく弱まるだろう。

つまり、ロシアと西側のどちらにとっても、長期的な政治・経済目標を達成するためには グローバルサウスの協力が不可欠である。今後数年で、どちら側がこの重要な争いで優位に立つのかが明らかになるだろう。

【翻訳チェック 田中靖宏】